

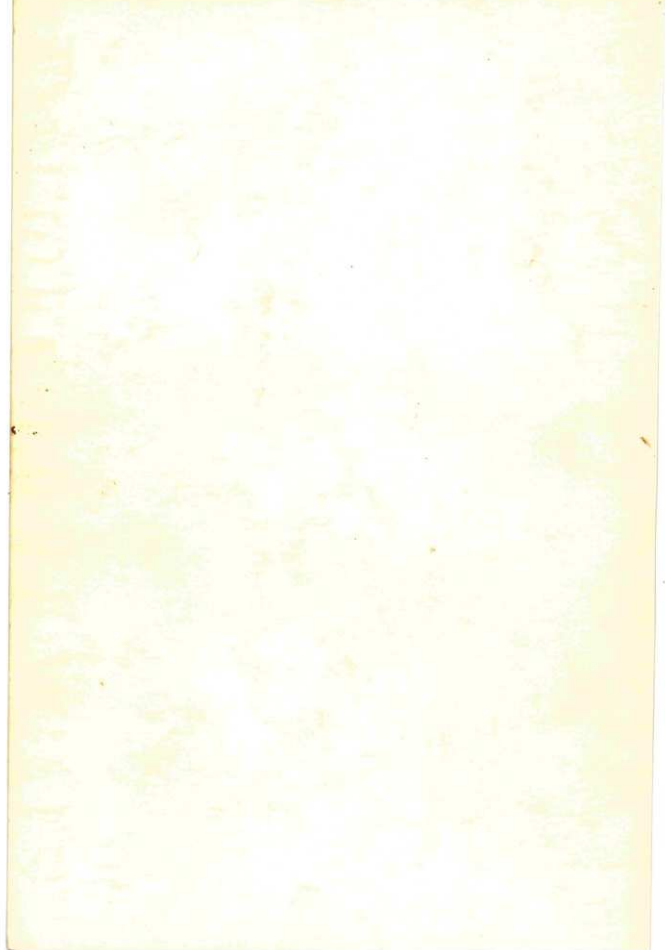
女 高 遺 跡

發掘調査概報

1985. 3

掛川市教育委員会

文化係



女 高 遺 跡

発掘調査概報

1985. 3

掛川市教育委員会

序

遺跡を含めてすべて文化財は先人の遺した貴重な文化遺産であります。これらは国民共有の財産として保存保護し、後世につたえ遺さなければならないことは言うまでもありません。

遺跡はわれわれの生涯に深くかかわってきた重要な要素の一つですが、また同時に自然環境とともに保護していくには容易なことではありません。

先人がさまざまな生活を展開してきた遺跡が所在する土地は山林・田畑などに属しており、指定史跡となっているものか、あるいは土地所有者の遺跡に対する理解により手をつけないというのが現状であります。

遺跡を内包している土地は地形的にすぐれており、遺跡とかかわりなく産業開発などの対象となっております。とくに近年の住宅用地造成・工場用地・土取りなど、開発事業の進展ともなって遺跡が消滅する頻度が多くなってきております。

このような状況は社会的要請ですが、遺跡を発掘調査したり保存することもまたわれわれに課せられた大きな責任の一つであります。

このたびの発掘調査は老朽化した茶樹を改植し、生産性の向上をはかる土地所有者の遺跡に対する深い理解によって実現したものであります。

調査は周到な準備と土地所有者をはじめ関係者各位の協力のもとにすめられ、本地域での弥生時代から古墳時代にかけての集落の変遷と行人塚古墳の規模が明らかになったことは大きな成果であります。

本書が歴史のあゆみを知り、また考古学資料として役立てば誠に幸甚であります。

昭和60年3月30日

掛川市教育委員会

教育長 伊藤昌明

例 言

1. 本書は、昭和59年10月1日から12月28日まで実施した静岡県掛川市吉岡字女高1188～1189に所在する女高遺跡おびかの発掘調査概報である。
2. 調査は、昭和59年度遺跡緊急発掘調査事業として国および静岡県の補助金を得て掛川市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査では、土地所有者の吉岡正象氏はじめ周辺土地所有者の鈴木しま・大場寿夫・大場浩・大場良松・福沢正志・山崎金作各氏から文化財保護に対し深いご理解とご協力を得ている。記して感謝の意を表したい。
4. 発掘調査は、掛川市教育委員会の松本一男が担当し、菊川町在住の藤原修二君の応援を得、また整理調査では国学院大学学生渡辺幸弘君の応援を得た。
5. 発掘調査ならびに整理作業では、次の方々に参加を得ている。
栗田和道・鈴木茂義・萩田国夫・大場朝子・大場しま・大場鈴子・大場せつ・大庭みよ子・小沢ろく・上村静子・鈴木きの・鈴木辰江・鈴木はや子・萩田みどり・原田ふじ・宮崎ひさ子・佐藤かやの（敬称略）
6. 調査ならびに本書執筆にあたって次の方々からご協力・ご教示を得た。記して感謝の意を表したい。
植松章八・佐藤由紀男・鈴木敏則・中嶋郁夫・平野吾郎・前田庄一・松井一明・水島和弘・向坂鋼二・吉岡伸夫・渡辺康弘（五十音順、敬称略）
7. 本書の編集・執筆は全て松本、遺物の実測を藤原・松本、トレースについては松本が行った。
8. 本調査ならびに本書刊行に関する事務は、掛川市教育委員会社会教育課（課長増田徹伸、文化係長岩井克允、主事松浦成俊、萩田弘子、伊達和代、松本一男）があたった。
9. 調査によって得た資料は全て掛川市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 挿図における方位は、磁方位を示す（1984.10）
2. 竪穴住居跡（S B）・掘立柱建物跡（S H）の実測図は1/60、出土土器実測図は1/2で統一して掲載し、他については任意縮尺により掲載した。
3. 遺物番号は、実測図（第19図）と写真図版（IXとX）とで共通のものである。

目 次

序

例	言
凡	例
目	次

はじめに	2
I 調査の方法と経過	2
II 遺跡の環境	5
III 調査の内容	6
おわりに	27

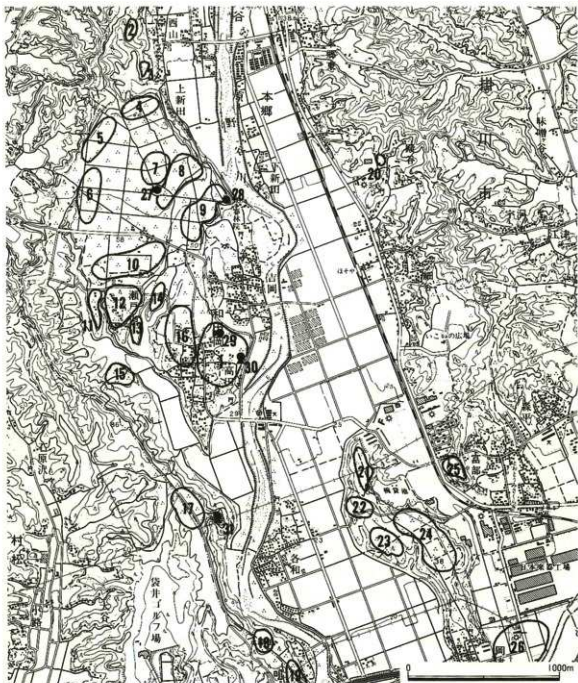
挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置および周辺遺跡分布図	1
第2図	調査区配置図	3
第3図	遺跡の周辺地形図	4
第4図	遺構全体図	7
第5図	S B 01・02 実測図	8
第6図	S B 03 実測図	9
第7図	S B 04 実測図	10
第8図	S B 05 実測図	11
第9図	S B 07・08・13 実測図	12
第10図	S B 07・08・13 断面図	13
第11図	S B 08 炉実測図	14
第12図	S B 09 実測図	15
第13図	S B 10・11 実測図	16
第14図	S H 01 実測図	17
第15図	S H 02 実測図	18
第16図	S H 03 実測図	19
第17図	1号方形周溝墓実測図	20

第18図	方形周溝墓状遺構実測図	21
第19図	出土土器実測図	24
第20図	行人塚古墳周溝実測図	25

図 版 目 次

図版 I (上)	遺跡の周辺景観 (航空写真)
(下)	遺跡近景
図版 II (上)	S B 01・02 完掘状況 (北から)
(下)	S B 03 完掘状況 (北から)
図版 III (上)	S B 04 完掘状況 (南から)
(下)	S B 05 完掘状況 (南から)
図版 IV (上)	S B 07・08・13 および周辺完掘状況 (北から)
(下)	S B 08 炉および土器出土状況
図版 V (上)	S B 09 完掘状況 (南から)
(下)	S H 01 完掘状況 (南から)
図版 VI (上)	S H 02 完掘状況 (北から)
(下)	S H 03 完掘状況 (北から)
図版 VII (上)	1号方形周溝墓完掘状況 (南から)
(下)	方形周溝墓状遺構周辺完掘状況 (西から)
図版 VIII (上)	行人塚古墳周溝完掘状況 (南東から)
(下)	行人塚古墳周溝完掘状況 (北から)
図版 IX	出土土器 (1)
図版 X	出土土器 (2)



- | | | | | | |
|---------|------------|-----------|---------------|------------|------------|
| 1. 女高遺跡 | 7. 中 原 | 13. 花ノ腰 | 19. 山 下 | 25. 二 反 田 | 31. 各和金塚古墳 |
| 2. 後藤ヶ谷 | 8. 高田上ノ段 | 14. 瀬戸山田 | 20. 殿ノ台 | 26. 黒 田 | |
| 3. 中 山 | 9. 吉岡下ノ段 | 15. 平田ヶ谷 | 21. 岡 津 原 I | 27. 吉岡大塚古墳 | |
| 4. 城ノ腰 | 10. 吉岡原 | 16. 高 ヶ 田 | 22. 岡 津 原 II | 28. 春林院古墳 | |
| 5. 東 原 | 11. 瀬戸山 II | 17. 金 鈴 原 | 23. 岡 津 原 IV | 29. 行人塚古墳 | |
| 6. 溝ノ口 | 12. 瀬戸山 I | 18. 松ヶ谷 | 24. 岡 津 原 III | 30. ひさこ塚古墳 | |

第1図 遺跡の位置および周辺遺跡分布図

はじめに

女高遺跡が所在する和田岡原は、縄文時代から古墳時代に属する遺跡が数多く存在することで広く世間に知られている。またこの和田岡原は、茶どころ掛川市にあって上内田地区とならんで特に茶の栽培が盛んな地域でもある。ところが近年茶樹の多くは老化をむかえ、新種のやぶきた茶に植えかえることが多くなった。茶樹の改植では、地表土と地山土との転換いわゆる“天地返し”を伴うことが多く、これが遺跡地内で行われた場合には、遺跡の消滅に結びつくこととなる。

これまで掛川市域では、数多くの遺跡がその犠牲となっており、和田岡原ではすでに茶畑全体の80%もの茶畑が改植済みで、これに伴い多くの遺跡が未調査のまま目の目を見ることなく土に戻されてしまった。

これから紹介する女高遺跡もまた茶樹改植を目前に控えた遺跡で、消滅がまぬがれないということから前回同様遺跡の記録保存を目的として調査を行った。調査は、地主の吉岡正象氏、耕作者の大場浩氏ならびに調査地周辺の地主さん等多くの方々のご理解とご協力をいただいて行った。ここに記して感謝の意を表したい。

I 調査の方法と経過

1. 調査の方法

今回の調査で設定した調査区画は、前回昭和57年度調査時に設定した調査区画に従ったもので調査区は、行人塚古墳後円部墳頂上に原点(A、1)を置き第2図のごとく配置される。

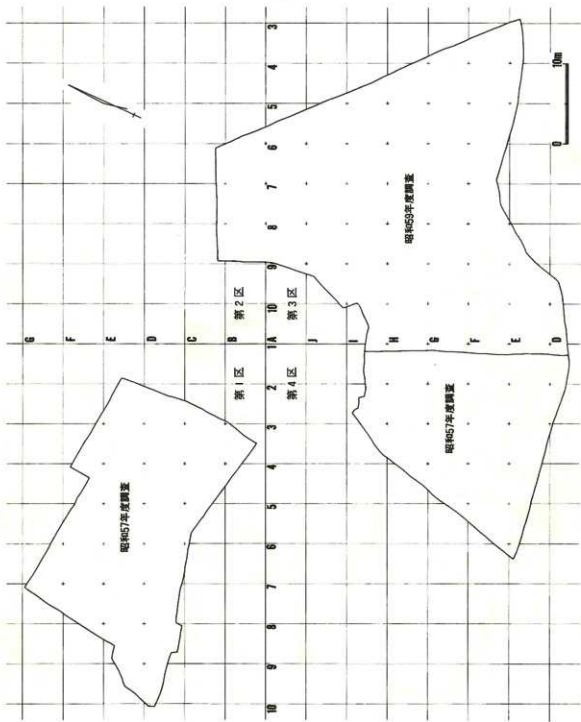
今回調査の対象となったのは、第2区A～B-5～8区の各区、第3区C～J-2～10区の各区ならびに第4区C～H-1区各区の一部で、調査面積は実質約1,200㎡である。

調査では、調査区画全体が土層観察用として利用できるようにしたが、結果的には耕作土を割ぐと地山土表面であり、そこが遺構の確認面となるものであった。したがって取り上げ遺物のうちで遺構外出土遺物は、多くが耕作土からの出土と考えられるものである。

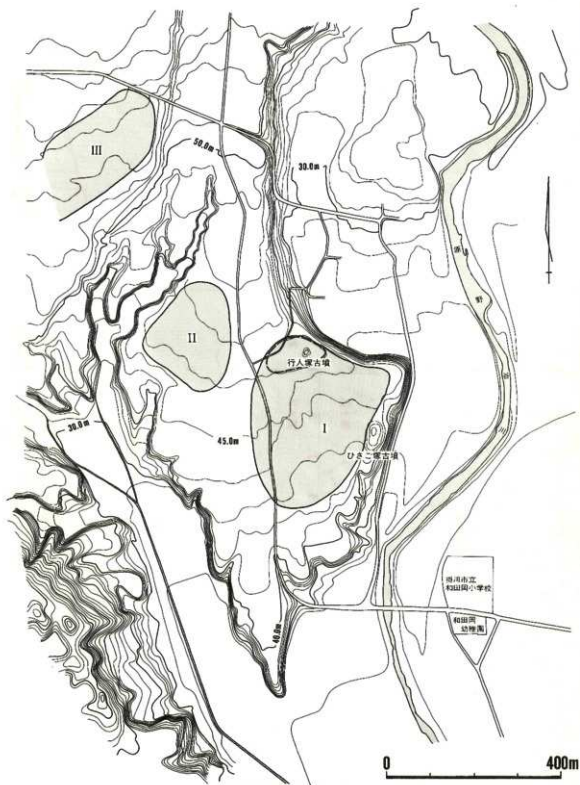
遺構の名称は、竪穴住居跡をSB、掘立柱状建物跡をSH、土坑をSF、小穴をPit、溝状遺構をSD、その他の遺構をSXとし、それぞれ今回確認された遺構別に01から連番で表記した。

現地での図面は、グリッド単位(一辺5m四方)に合わせ20分の1縮尺を基本とし、遺物出土状況等詳細図面は10分の1の縮尺とした。

記録写真は、ブローニーサイズ原画 白黒、35mmサイズ原画 白黒・カラーリバーサルで撮影した。



第2図 調査区配置図



第3図 遺跡の周辺地形図

2 調査の経過

- 10月5日 調査に先だち調査区内の各所に試掘坑をあげ土層確認を行う。
- 10月8日～13日 試掘坑での確認に基づき重機による耕作土の掘削。
- 10月13日～18日 調査区内への杭打ちならびに人工による耕作土掘削。
- 10月19日～11月14日 行人塚古墳後円部周溝の調査。周溝全体掘り下げに先だち試掘トレンチを周溝内に入れる。その観察に従い掘り下げるが、周溝内には多量の礫が集中して包含されており、調査には時間を要した。
- 10月25日～12月18日 古墳周溝以外の遺構（堅穴住居跡・掘立柱建物跡・方形周溝墓等）の調査。調査区内には現代の畑作による擾乱が多く入りこんでおり、遺構の保存状態は必ずしも良いものばかりではなかった。
- 12月19日～24日 遺構の掘り下げも終了し、全体の完掘状況写真撮り、小Pit等の図面追加を行い現地での作業を終了とした。

II 遺跡の環境

女高遺跡の所在する掛川市和田岡地区の吉岡原・高田原では、縄文時代以降人々が自然の恵みの中で営んできた足どりを数多くさがし求めることができる。中でも弥生時代後期から古墳時代前期に属される遺跡が数多くあり、台地縁辺部を中心として内陸部まで大規模に展開している(第1図)。

女高遺跡周辺を拡大図示したものが第3図である。Ⅰが女高遺跡、Ⅱが高田遺跡、Ⅲが吉岡原遺跡で、女高遺跡の拡がりの内でも今回報告する時期に属する遺物が散布する範囲は点線で囲った範囲である。

遺物の散布する範囲をながめてみるといずれも小谷を囲む形で遺物が散布しており、台地上に集落跡あるいは墓跡が存在し、台地下には谷を利用した簡単な水田が広がっていたものと想像される。女高遺跡の人々は台地東側の沖積面に、また吉岡原遺跡・高田遺跡あるいは第3図で図示できなかった瀬戸山の各遺跡の人々は台地西側の谷に水田耕作を営んだものと思われる。また、この集落と水田とを結ぶ道として現在私達も利用することのできる農道がそのまま当時の農道としても利用されていたものと思われる。集落規模は未調査部分が多く不明であるが、これら谷部での水田耕作は人々の食生活を充分満たすことのできるものであり、その不足食料として原野谷川等河川から、あるいは後背部に広がる山野から供給していたものと思われる。

このような自然環境を背景に女高遺跡の人々は生活を営み、同時に同じような生活を営む隣村の高田遺跡あるいは吉岡遺跡の人々と有機的に付き合いを行ったものと思われる。

III 調査の内容

今回の発掘調査では、女高遺跡の存続時期が古墳時代初頭期にまでびること、集落の東端付近が確認できたこと、集落東端域には方形周溝墓という墓制による墓域が存在すること等大きな成果をあげることができた。

検出した遺構は、第4図からも明らかなおり、竪穴住居跡13軒（内1軒については、遺構確認のみ）・掘立柱建物跡3棟・土坑3基・意味不明遺構7基（内記載しなかったがSX02・SX04は現代の攪乱と判明）が確認された。また行人塚古墳に関しては、予想された位置に周溝が検出している。しかし後述するが周溝は3箇所において断絶するものであった。

本報告では、予算的事情と時間的事情から全ての意構・遺物の紹介ならびに検討はさけた。したがって本報では、竪穴住居跡SB01～05・07～11・13の11軒についてと、掘立柱建物跡3棟、方形周溝墓、そして行人塚古墳周溝についてのみ報告したい。

1. 遺 構

今回確認できた遺構の配置状況を第4図に示した。これを見てわかるように、調査区西南域に住居跡が集中しており、方形周溝墓が東端域に検出している。また行人塚古墳周溝によって住居跡が切断されている状況から、この古墳下にも十数軒もの住居跡があったであろうことは想像されるところである。

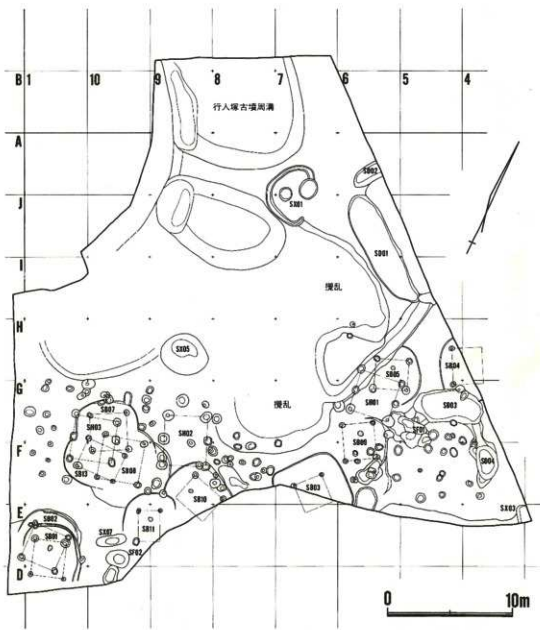
次に、検出した遺構ということで住居跡、掘立柱建物跡、方形周溝墓、古墳周溝の順に紹介していきたい。

SB01・SB02（第5図）

検出域は、第3区西南端C～D-10である。SB01とSB02とは、切り合い関係にあるが両者の長軸方位差が17°ずれており同一血縁者による建て替えの住居であったかどうかかわからない。両者の新旧関係は、覆土観察、貼床面の残存状況、検出したかしの残存状況からSB01の方がSB02よりも新しい住居跡であると判断している。

プランは、南および西域を攪乱されており明確ではないが、両者ともほぼ楕円形を呈す。住居跡の規模は、SB01が長径不明×短径4m63cm、SB02が長径不明×短径4m94cmである。住居跡の主柱穴間距離は、SB01が2m82cm×2m40cm、SB02が3m00cm×2m82cmである。SB01・02両者には、壁際に壁溝が巡っており、規模は幅24cm×深さ6cm呈を測る。この壁溝は、SB01では全周する可能性が見られ、SB02では部分周と考えられる。

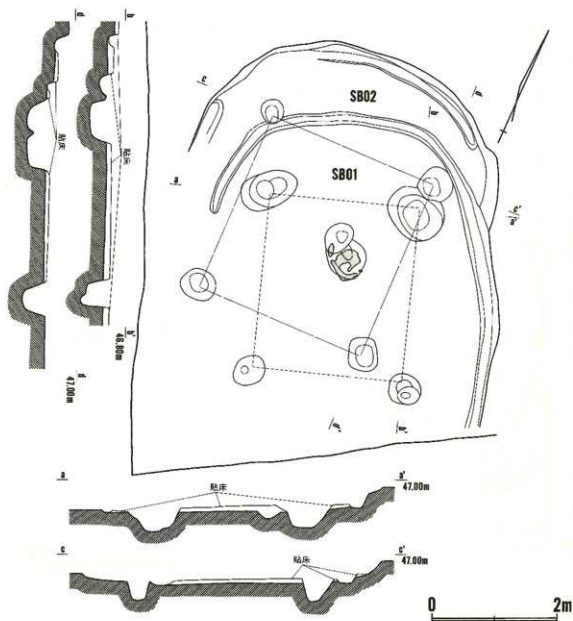
住居跡覆土は黒褐色土で覆われ、床はロームブロックを若干含む暗褐色土でかたく踏みしめら



第4図 遺構全体図

れた貼床面が形成されている。

SB 01 の長軸方位は、 $N-18^{\circ} 40' -W$ で、SB 02 の長軸方位は、ほぼ磁北方位の $N-1^{\circ} 30' -W$ を測る。



第 5 図 SB 01・02 実測図

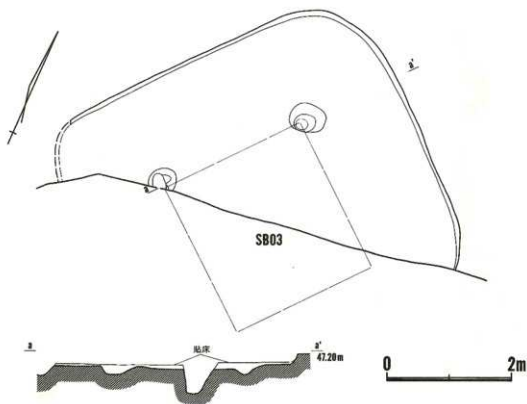
SB 03 (第 6 図)

第 3 区 D ~ E - 5 ~ 7 において検出、他の住居跡とはプランが異なり方形プランを呈している。規模は、長径不明 × 短径 5 m 77 cm で今回検出した住居跡で最大形の大きさを測る。主柱穴間距離は、不明 × 2 m 40 cm である。住居跡の長軸方位は、N - 50° 50' - W を測る。

住居跡の覆土は黒褐色土で、ロームブロックの混入した土によって貼床が確認された。SB 03 では明瞭な掘り方が確認できており、それは平面形「コ」の字状に掘られるものであった。

SB 03 の南側部は、調査区域からはずれている為、SB 03 に伴う炉は検出できなかった。

SB 03 からの出土遺物は、第 19 図 - 4 で床面直上からの出土である。SB 03 が使用されていた頃のものと考えられる。



第 6 図 SB 03 実測図

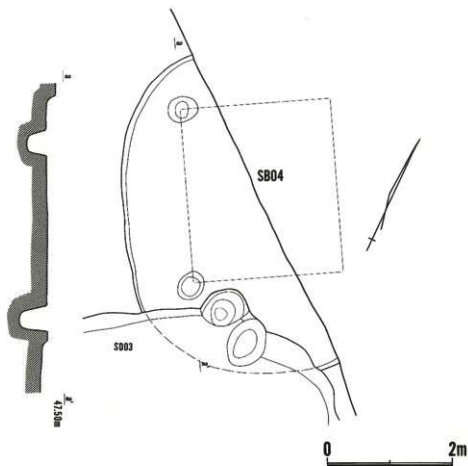
SB 04 (第7図)

第3区F～G-3～4において検出した住居跡で、東側部は調査区域外で確認していない。

住居跡プランはほぼ楕円形であると考えられる。規模は推定で、長径5m30cm×短径4m44cmを測る。支柱穴間距離は、長径2m80cm×短径2m40cm(推定)を測る。住居跡の長軸方位は、N-28°40'-Wを測る。

住居跡の覆土は黒褐色土で、貼床はほとんど形成されていなかった。あえて言うならば、検出した柱穴のうちの北寄りの柱穴付近で凹地がみられた程度である。

住居跡に伴う炉は、住居跡東半分が調査区域の外までおよんでいる為検出できていない。壁際にも焼土らしき痕跡はなかった。



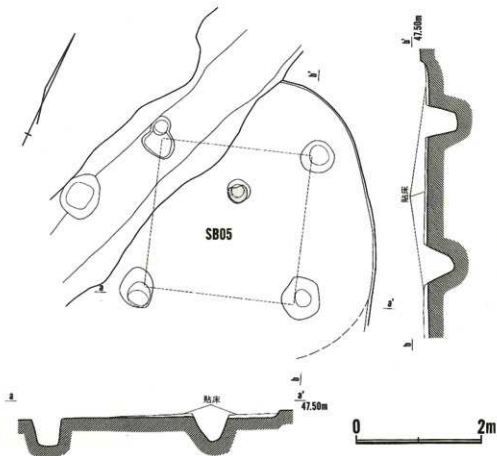
第7図 SB 04 実測図

SB 05 (第 8 図)

SB 05は、F～G-4～5において検出した住居跡で、西側において現代の攪乱により一部を壊されており、南側部においてもSH 01と切り合い関係にあり壁面を消失している。SH 01との新旧関係は、SB 05の方がSH 01よりも古いと考えられる。

SB 05の住居跡平面プランは、ほぼ楕円形になると思われる。規模は、長径4m47cm×短径4m20cm(推定)を測り、支柱穴間距離は、南北2m40cm×東西2m40cmでほぼ正方形となる。また、住居跡の長軸方位は、N-17°40'-Wを測る。

住居跡の覆土は残存状態が悪く5cm前後しかなく、ほぼ黒褐色を呈した土であった。床は暗黄褐色土(ロームがブロック状に含まれる)による貼床が施されていた。掘り方は、特に形状はな



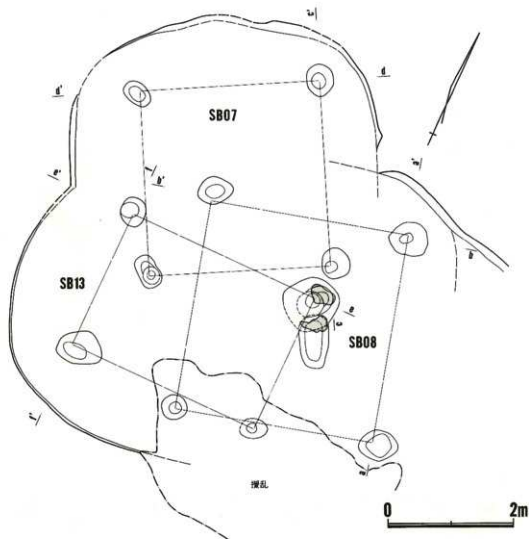
第 8 図 SB 05 実測図

くあえて表現するならば、東側柱穴にまたがって溝状掘り込みがみられただけである。他はほぼ平坦であった。

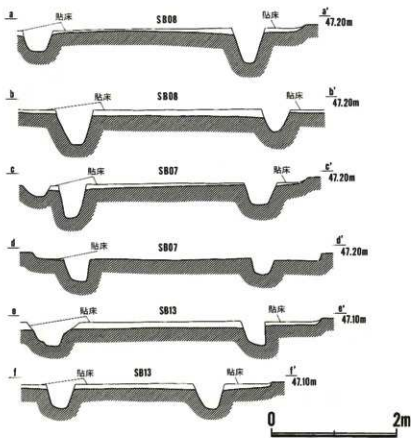
炉は、住居跡中央より北寄りに検出しており、東西の柱穴を対峙させる位置に検出した。

出土遺物は小破片がほとんどであるが、今回報告分と時期は同じと思われる。今後整理の上紹介していきたいと思う。

S B 07・08・13 (第9～11図)



第9図 S B 07・08・13実測図



第10図 SB 07・08・13 断面図

距離は、SB 07 が南北 2m97cm×東西 2m88cm、SB 08 が南北 3m38cm×東西 3m21cm、SB 13 が東西 3m21cm×南北 2m31cmを測る。また住居跡の長軸方位は、SB 07 がN-27°30'-W、SB 08 がN-14°30'-W、SB 13 がN-89°00'-W (W-1°00'-N) となり、SB 13 が 07・08 とは向きを大きく異にしていることが注目される。

住居跡の覆土は3者とも区別できず、全て黒褐色土である。

それぞれの住居跡床は貼床が施されているが、特異な形となる掘り方はみられなかった。全体的にはほぼ平坦で、小さな凸凹が各所に見られる状況であった。

検出した炉は一ヶ所でそれは位置からSB 08に伴うものと判断している。炉掘り込み下からSB 08より古いSB 13の柱穴も検出しており、これからもSB 13→08の順がうなずける。施土は、ブロック状の堅く焼けた粘土で、炉掘り込み内には土器1・2(第19図1・2、図版IX 1・2)が出土しており、出土状況から炉使用時の遺物であると判断している。

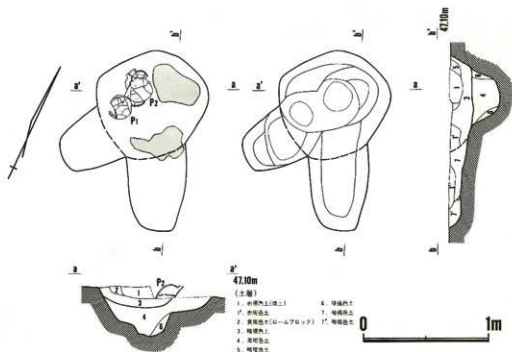
住居跡覆土からの出土遺物は第19図3(図版IX 3)で床直上の資料である。この他の出土遺物は小破片土器であるが、ほとんど時期差のない資料と思われる。

SB 07・08・13はそれぞれ切り合い関係をもって、E～F-9～10に検出した住居跡である。

住居跡のプランは明確でないが、柱穴の配置状況からそれぞれはほぼ楕円形を呈すものと思われる。

これら3基の住居跡の新旧関係は、覆土差による観察は困難で推定の域を出るものでないが、検出炉の位置、貼床面残存状況、調査時の掘削による感触等からSB 13→SB 07→SB 08の順であると判断している。

それぞれの支柱穴間



第11図 SB 08 伊実測図

SB 09 (第12図)

SB 09は、E～F-5～6において検出した住居跡で耕作土を除去した段階ですでに床面が露出した。西側部が現代の攪乱を受け消失しており、南側部でも意味不明の掘込みによって消失している。したがって調査では、床面を剥ぎ柱穴を検出しておよその住居跡規模をつかんだ。

住居跡のプランは明確でないが、確認した柱穴配置から楕円形と判断している。主柱穴間距離は、東西2 m40cm×南北3 m00cmを測る。

炉は、住居跡中央よりやや北寄りに検出しており、東西柱穴を対峙させる直線上に位置している。

第12図住居跡断面図下場は、床面を除去した状況つまり掘り方断面図である。掘り方は、ほぼ平坦で小さな凸凹面がみられた。

なお、SB 09の長軸方位は、N-30° 50' -Wである。

SB 10・11 (第13図)

SB10とSB11は、D～E-7～9において検出した住居跡で南側部が調査区域外であったり部分的に攪乱を受け、完全な形で検出していない。

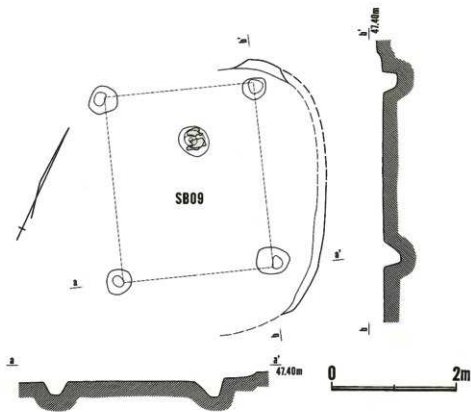
SB10とSB11との新旧関係は覆土観察から明らかとすることができなかった。ただ床面の残存状況からSB10→SB11の関係と判断している。

住居跡プランは、両者とも全貌をうかがえる状況でないため確かでないが両者とも楕円形であると考え。したがって規模は不明である。支柱穴間距離もSB10では支柱穴が一部検出できず推定の域を出るものではないが、SB10が南北2m40cm（推定）×東西2m91cm、SB11が東西2m38cm×南北2m60cmを測る。

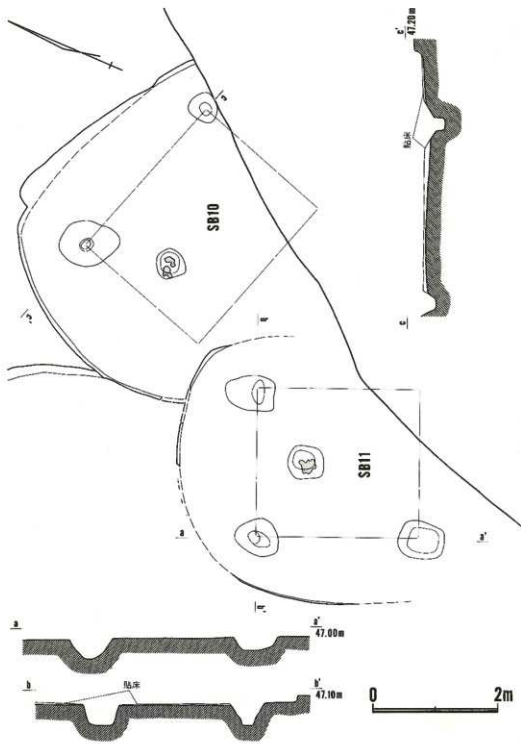
がはそれぞれSB10が住居跡中央より西寄りの南北柱穴を対峙させる位置に、SB11がやはり住居跡中央よりやや北寄りの東西柱穴を対峙させる位置に検出している。

住居跡の長軸方位は、SB10がN-72°50'-W(W-17°10'-N)、SB11がN-23°30'-Wである。

住居跡の床状況は、SB10・SB11ともに貼床が施されており、床面下には小穴があり凸凹面



第12図 SB09 実測図



第13圖 SB10・11実測図

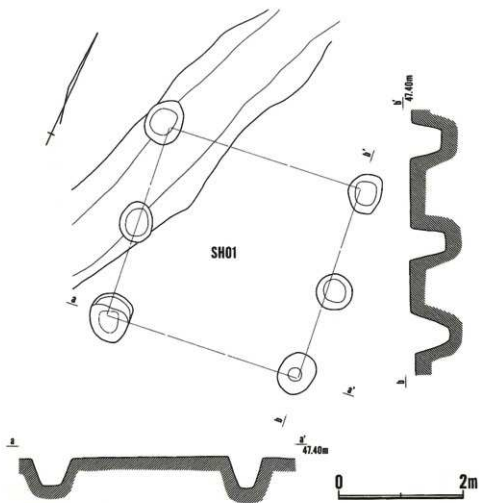
が見られたが、全体的には平坦面を成すものであった。

SH 01 (第14図)

SH 01は、F～G-5に検出した掘立柱建物跡である。北東部でSB 05と切り合い関係にあり、南部でSB 09と接している。また西北部では、現代の攪乱により柱穴の一部を変化させている。SB 05とSB 09とSH 01との新旧関係は、SB 05→SH 01、SB 09→SH 01となるもののSB 05とSB 09との新旧関係は確かでない。

柱穴はほぼ60cm径の深度(確認面からの深度)60cm前後といった柱穴の構成によりなる。

柱穴間距離は東西3m22cm×南北3m22cmのはほぼ正方形を呈しており、間口2間×奥行き2間



第14図 SH 01 実測図

となる。

長軸方位は、ほぼ北向きの $N-6^{\circ}00'-W$ である。

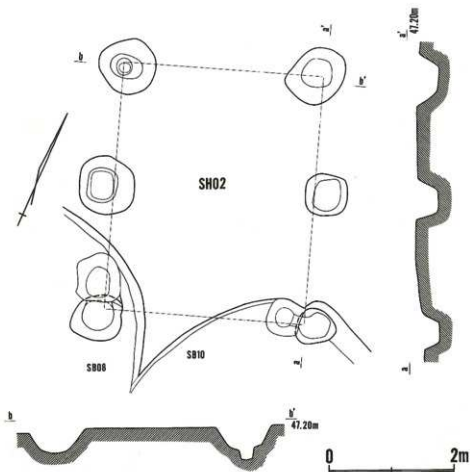
柱穴からの出土遺物はないが、今次調査報告分の土器と同一時期に属されると考える。

SH 02 (第15図)

SH 02は、E~F-8において検出した独立柱建物跡である。南側部においてSB10と他遺構によって切り合い関係にある。これらの新旧関係は、SB10→SH02である。

柱穴の規模は、SH 01・03と比べると大きく径87cm前後・深度42cm前後を測る。なかでも北西に位置する柱穴は特に深く54cmを測るものであり柱痕の残る柱穴である。

柱穴間距離は、東西3m21cm×南北3m98cmを測り、形状は長方形を呈する。間口2間×奥行



第15図 SH 02 実測図

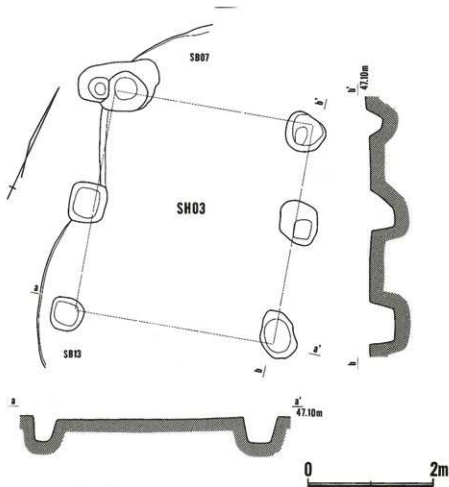
き2間半の勘定となる。

柱穴間の長軸方位は、 $N-20^{\circ}00'-W$ である。

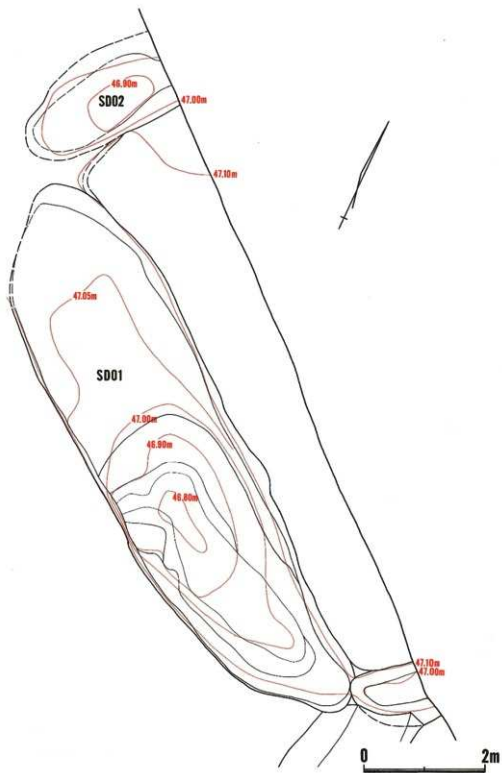
SH 03 (第16図)

SH 03は、E~F-9~10において検出した掘立柱建物跡である。北側と南側においてそれぞれSB 07とSB13とに切り合う関係にあった。これらの新旧関係は、SB13→SB 07→SH 03の順かと思われる。

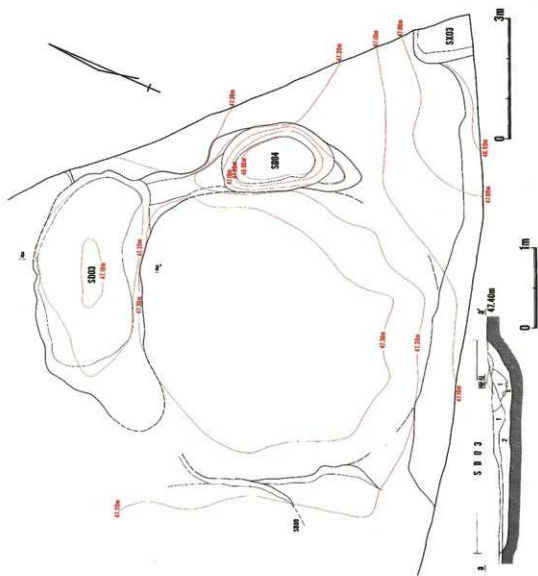
柱穴の規模は、径66cm前後・深度は42cm程度を測るもので、柱穴間距離は東西3m23cm×南北3m59cmを測る。建物柱穴配置は長方形となるよう配置されており、間口2間×奥行2間半となるような形状となる。



第16図 SH 03 実測図



第17图 1号方形周溝基实测图



第18图 方形周溝墓状遺構実測図

SH 03 の長軸方位は $N-14^{\circ} 40' -W$ である。

1号方形周溝墓 (第17図)

1号方形周溝墓は、調査区の東端H~J-5~6において検出しており主体部および東側溝は調査区外で全く検出できなかった。調査区東側域は台地縁辺部にあたるが、検出した方形周溝墓から崖線までは10m程あり、台地が南に向って広がっている状況から他に方形周溝墓が数基存在しているものと思われる。

規模については、全貌のはっきりとしていない今不明とせざるを得ない。したがってここではSD 01の形状のみ述べることにする。

SD 01は、下場規模で全長 $9\text{ m}67\text{ cm}$ × 最大幅 $2\text{ m}40\text{ cm}$ を測る。溝内中央よりやや南寄りが一段窪んでおり、そこを中心として遺物が多く出土した。遺物出土状況を図示しなかったが、溝内には多量の礫が包含されていたことを付け加えておく。

方形周溝墓周溝は、コーナー部において断ち切れとなる形をとるが、上面において浅く他溝と連結する状況にあったと思われる(第17図SD 01南端部から南溝にかけて参照)。

溝内からの出土遺物は、第19図7・8である。

方形周溝墓状遺構 (第18図)

調査区の東南隅D~F-3~5の範囲では、SD 04 (全長 $2\text{ m}10\text{ cm}$ × 幅 $1\text{ m}26\text{ cm}$ × 深さ 35 cm) とSD 03 (全長 $4\text{ m}20\text{ cm}$ × 幅 $1\text{ m}98\text{ cm}$ × 深さ 25 cm) の2つの溝を検出した。これに基づき現地でも西側部と南側部において溝の検出に努めた。しかし西側部ではSB 09による落ち込み検出と南寄りに別の落ち込みを検出したものであり、南側部では僅かであるが河岸段丘面による自然傾斜面にあっており、他の溝は検出できなかった。

また方台部上で主体部となるべき遺構は検出できておらず、方形周溝墓としての決め手を欠いている。したがってここでは、方形周溝墓状遺構と表記した。

現地地形測による等高線復原を合わせ第18図に図示しておいた。

第19図5はSD 03から、6はSD 04からの出土遺物であることを付記しておく。

この他今回の調査では、土坑(SF)、意味不明遺構(SX)ならびに多数の小穴を検出しているがここでは頁数の関係上触れない。

また住居跡関係では、E-7グリッドSB 03寄りに焼土(炉と思われる)を検出確認しているが、それに伴う柱穴を確認できなかった為、現地でSB 12と命名した住居跡もここでは紹介を避けた。

2 出土遺物（第19図）

今回の調査で出土した遺物は多くが土器破片で、出土量は収納コンテナ（336×540×200）に詰め込んで5箱程度と非常に少ないものであった。この中から特に器形復原の可能な遺物のみを抽出して図化したものが第19図である。このうち第19図1～3はSB08、4はSB03、5はSD03、6はSD04、7・8はSD01からの出土である。特に1・2はSB08の炉からの出土で共伴して出土したものである。以下個々に説明を加える。

1は、口径13.5cm×器高21.6cm×胴部最大径17.9cmを測る。口唇部にナデ調整がみられる。口縁部はハケ調整の後ナデ調整がみられる。胴部では上部で荒いハケ調整から細かいハケによる調整が、胴下半部では荒いハケ調整の後ヘラ磨きが施されている。内面では、頸部から口縁部にかけてハケからナデ調整がみられる。胴部内面ではハケの後板ナデが施されている。

2は、口径16.3cm×器高不明×胴部最大径19.2cmを測る台付甕で、台部を欠損する。1と同様口唇部をナデにより調整されており、口頸部から胴下半にかけてハケ目が見られる。また部分的にはナデも見られる。内面は、口縁部に横位にハケ目が、胴部は板ナデの後ナデが施されている。胴下半部では一部ハケ目が残存している。

3は、胴下半部に明瞭な稜線のみられる小型の壺である。胴最大径は10.8cmを測る。内外器面調整は器面状態が非常に悪く不明である。また胴下半部にかけて黒斑が見られる。

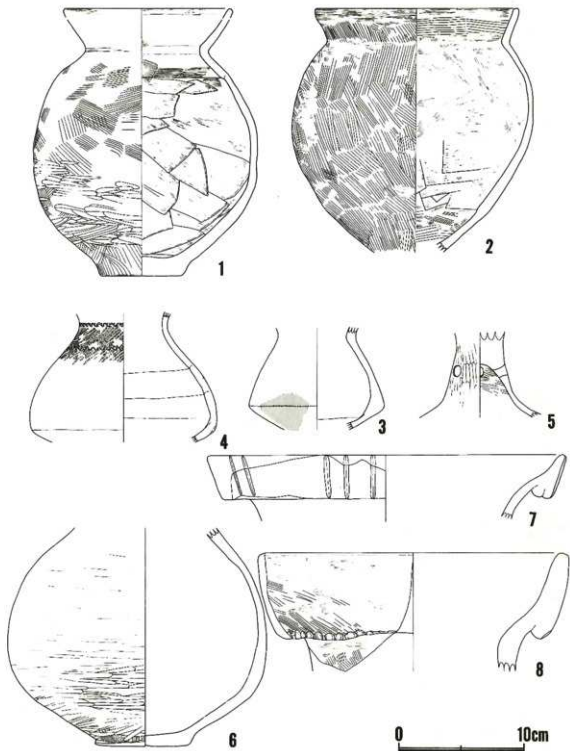
4は、3同型の壺で胴上部肩部に結節縄文が2段に施文されている。胎土色調は他土器と違い黒色を呈しており器面に丹塗りが施されている。

5は、三方に円窓をもつ高坏脚部片である。下部において屈曲する形態をとる。器面は縦位方向にヘラ磨きが施されるものである。

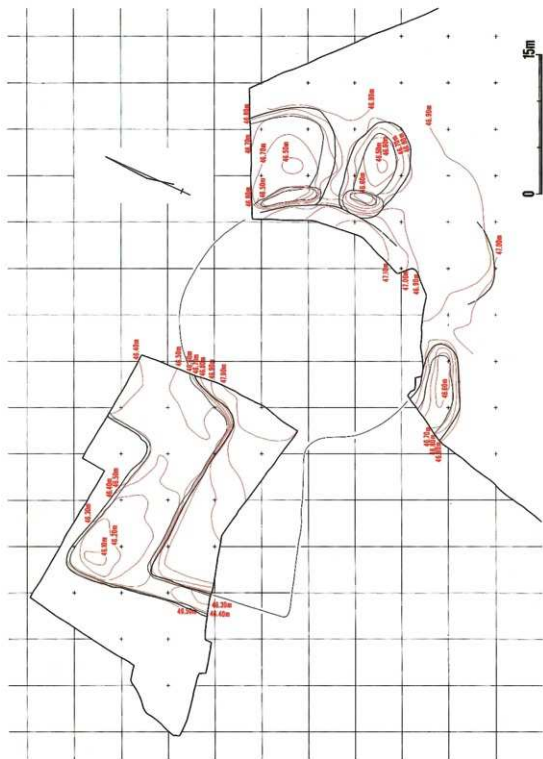
6は、胴下半部に最大径20.7cmをもつ壺である。口縁部を欠損している。器面調整は、ハケ調整の後丹塗りにらびにヘラによる研磨が施されている。内面では、全体にナデが見られ、底部においてのみハケ目が見られる。

7・8は、折り返し口縁形態をもつ壺形土器片である。7は折り返し口縁上に棒状浮文をもつ。浮文の単位は不明である。8は折り返し口縁部に浮文はもたないが、口縁部下端に指頭状圧痕が見られる。復原口径は24.8cmを測る。器厚も他土器と比べかなり厚く1.5cm前後を測る。

以上が、今年度調査分において最も器形のわかる土器群である。土器の個々の特徴からこれらは古墳時代に属する時代の遺物であると思われる。県内において類例を求めると、青木遺跡（浅羽町）A25グリッド出土遺物⁽¹⁾・椿野遺跡（浜松市）SD24出土遺物等⁽²⁾があげられる。これらの資料と比較すると、これまで女高遺跡からの出土した遺物の中にはS字状口縁甕が全く含まれておらず、女高遺跡のあり方に興味をもたれるところである。今後、これまで出土した女高遺跡の資料を整理していくなかで検討を加え、時間的位置付け等を報告していきたいと思う。



第19图 出土土器实测图



第20図 行人塚古墳周清実測図

3. 行人塚古墳周溝（第20図）

今年度調査により検出した遺構の中から行人塚古墳の周溝のみを取り出し、前回調査分と合わせて作成した図が第20図である。図中では、周溝平面図作成時に計測した標高から周溝内等高線を復元し合成図示した。

ところで行人塚古墳に関してこれまでに調査した箇所は、古墳全景の殆程で全貌を知り得るものではないが、ここでは推定規模も合わせてこれまでにわかった古墳の形状・規模等⁽³⁾について再度整理して報告したい。

形状：前方後円墳	周溝規模
主軸方位：W-7°-S	前方部溝：幅2 m 20cm前後・深度30cm前後
全長：43 m 70cm	前方部側溝：幅6 m 50cm～8 m 50cm 深度30cm～60cm
後円部径：25 m 40cm	後円部溝：幅10 m～10 m 50cm 深度30cm～60cm
前方部長：18 m 30cm	
前方部幅：16 m 00cm（推定）	

を測る。

また今回の調査によって確認できた古墳周溝の特徴は、

1. 後円部側周溝は、古墳主軸線上付近において陸橋部を有し断絶する。
2. 後円部側周溝は、後円部南西部位において断絶する。土地所有者の話によると従前当該域には小山が存在していたとのことであるので、後円部南西部位に造り出し部を有する前方後円墳ではないかと思われる。

である。

今回調査分をも含めこれまでの発掘調査ならびに表採活動において、この行人塚古墳に係る遺物の採集は全く無い。したがって、古墳主体部未調査の今この行人塚古墳の築造時期を決める手がかりは、古墳規模・形状からの推論による方法のみであるかと思われる。しかし本報においては類例収集の最中であり何ら検討を加えていない為、事実記載したのみで報告を終わる。今後先賢諸氏のご教示をいただき、検討を加え報告したいと思う。

<参考文献ならびに註>

- (1) 柴田稔・浅羽町教委「県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（昭和56年度分）青木遺跡・馬場第1遺跡・西立遺跡」（1982）
- (2) 鈴木敏則氏よりご教示いただいた。
- (3) まず前方部線上に前方部幅を二等分させる点を求め、そこに垂線（主軸線）を設定した。主軸線上において後円部各所に内接する円の中心点を後円部径の中心点とし、それから後円部径を求めた。規模の計測では、築造当時の地表面に近い遺構確認面上を計測点として使用した。

お わ り に

これまでに行われた女高遺跡に関する発掘調査は、今年度分を含めて2回、調査地点にして3地点、調査面積にして約2,300㎡の広さを調査したことになる。この調査によって検出した遺構の数は、竪穴住居跡30軒（確認のみの住居跡も含む）・竪穴遺構（意味不明）8基・掘立柱建物跡5棟・土坑16基・方形周溝墓1基・方形周溝墓状遺構2基・その他の小穴多数である。この検出遺構の数は、一遺跡の調査例としては決して少ない数ではなく、むしろ女高遺跡という村落が当時にあってかなり大きな村であったことが想像されるものである。また、調査によって出土した遺物を観ても、弥生時代から古墳時代に至るまでのものが多く出土している。これは、単に弥生時代あるいは古墳時代の遺物であることを示すものでなく、当時の女高遺跡の人々が弥生時代の生活の中からどのように古墳時代という新しい時代を迎えたのか、ということを物語る資料としても重要である。

また行人塚古墳に関してしても今だ築造時期については不明で、和田岡古墳群にあってどのような時間的位置にくるのか、あるいは古墳築造を任せた人々と女高遺跡の人々とはどのように関連してくるのか等、今回調査した女高遺跡をはじめとする和田岡原一带に位置する遺跡群がかかえる課題は多い。

今後、女高遺跡出土資料を整理する過程において、あるいは遺跡発掘に際しては上記課題を前提として行い、今だ解明されていない和田岡一带の、広義の意味で掛川市の原始・古代の一端を解くよう調査は行わなければならない。

（了）

版 圖



図版

←Iコ

遺跡の周辺景観（航空写真）



遺跡近景

図版
II



SB01・02 完掘状況（北から）



SB03 完掘状況（北から）

図版
III



SB04 発掘状況（南から）



SB05 発掘状況（南から）

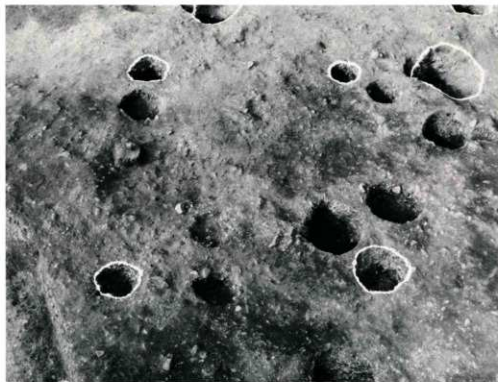


SB07・08・13 および周辺完掘状況（北から）



SB08 炉および土器出土状況





SB09 完撫状況（南から）



SH01 完撫状況（南から）



SH02 完掘状況 (北から)



SH03 完掘状況 (北から)

図版
VII



1号方形周溝墓完掘状況（南から）



方形周溝墓状遺構周辺完掘状況（西から）



行人塚古墳周溝完掘状況（南東から）



行人塚古墳周溝完掘状況（北から）



1



2



3



4

出土土器(1)



6



7



5



8

出土土器(2)

女高遺跡

発掘調査概報

昭和60年3月30日

編集発行 掛川市教育委員会
掛川市水垂51
TEL (05372) 4-7773

印刷所 株式会社 三 創
静岡市豊田3丁目5番30号
TEL (0542) 82-4031

